学位論文の内容の要旨

申請者氏名　南征吾

論文題目　訪問作業療法における家族介護者の理解と援助技術に関する研究

地域包括ケアシステムの在宅医療体系の充実により，患者の人生の最期を自宅で看取る家族介護者が増大すると考えられる．本論の目的は，在宅療養を支援する家族介護者の作業経験と作業適応を知り，作業療法の家族介護者に対する家族支援の実体構造を明らかにすることである．そこで，訪問作業療法の実践が患者家族に及ぼす影響を明らかにできれば，地域包括ケアシステムで患者と家族のケアを推進する時の作業療法の重要性を示すことができ，研究の価値があると考えた．なお、本論の第 1 章と第 2 章は，修士論文のデータを再度解析し直し，カテゴリを再度立ち上げて信憑性と信用性を高め，訪問作業療法の介入の視点を考察に加えたものである．

第 1 章では，質的研究を実施した．家族介護者の作業適応に寄与する作業の影響を明らかにするために，患者が没後 1 年以上を経過した家族介護者を対象者に質的研究を採用し実施した．結果，9 名の家族介護者へのインタビューデータを解析した時点で，理論的飽和に達したと判断した．分析により 6 つのカテゴリが抽出された．家族介護者の【闘病生活に向き合う作業】として，がん患者と≪共に実施した行為≫と≪家族自身が実行した行為≫が抽出された．それは，没前の【重圧に圧倒されている】なかで，【不安に打ちのめされない生活】を奮励する要因であった．さらにそれは，没後の【励みになる作業の記憶】に移行し蓄積され，【心境の整理がしにくい】場面で【心境の切り替えへ繋がる】きっかけとなっていることがわかった．訪問作業療法士は，家族介護者に介護方法の指導を実施しながら，没後を想定し闘病中より認められる作業的挑戦や作業的役割期待に向きあえる十分な環境をつくる必要があると示唆された．そして，没後に作業的喪失が複雑化しないように闘病中に作業経験を積めるよう支援することが重要であると考えられた．

第 2 章では，第 1 章のデータをもとに事例-カテゴリ・マトリックスの手法を用いて，各事例のカテゴリの内容とパターンを分析し，それを基に事例を作業遂行パターンと作業類型に分類した．作業類型化の結果，事例は「作業の継続型」と「作業の再開型」と「作業の途絶型」にわけられた．「作業の継続型」と「作業の再開型」では，家族介護者の心境の切り替えの促進に作業への参加が役立っていた．「作業の途絶」では，心境の整理が不完全であった．患者の没後に，心境の整理が不完全な作業の途絶型に家族介護者が陥らないように，闘病中より家族介護者の作業に着目した支援の必要性が示唆された．また，家族介護者の心境の切

り替えを促進するには，闘病中より認められた作業的挑戦や作業的役割期待を担い肯定的な作業経験を積むことが，没後の心境の切り替えに役に立つと示唆された．

第 3 章は，訪問作業療法士の家族介護者に対する援助技術のプロセスについて質的研究を用いて分析した．訪問作業療法士は，2010 年の作業療法白書の領域別会員数の比率によると極めて少ない現状で，在宅緩和ケアに携わっている作業療法士となると，さらに少ないことがわかった．そのため，訪問作業療法士の家族介護者支援について明らかにするだけでも貴重なデータだと考えた．結果，訪問作業療法士 9 名にインタビューで理論的飽和に達したと判断した．分析の結果，5 つのカテゴリが抽出された．訪問作業療法士の家族援助の基盤に，【家族介護者の疲弊感】と【患者の能力に対する誤解】が確認された．作業療法士はそれがあるなか，【家族介護者の健康に対する気配り】をしながら家族介護者に寄り添い，【患者の理解の促進】ができるように，対象者の生活行為の披露や説明を実施し，家族介護者の患者に対する関心を引き出すよう援助していた．さらに作業療法士は，家族介護者の健康と患者の理解を促進するために作業を媒介として【家族介護者と患者の協業】を図っていた．訪問作業療法士の役割として，家族介護者の介護負担感に配慮しながら，無理のない程度に，家族介護者と患者の協業作業を実施する中で，家族介護者と患者の良い関係を促進し，生活行為の拡大に努めることが示唆された．

総合考察では，第 1 から 3 章までをまとめて，家族介護者を理解するための視点と家族介護者と患者との協業作業の援助プロセスを提案した．前者においては，家族介護の負担感や介護力を正当に見積もる能力が最も訪問作業療法士に求められる視点であった．後者においては，①家族介護者と患者の関心を抱いている協業作業を整理し,②家族同士が乗り越えられそうな挑戦課題を提供し，③家族介護者と患者が成功体験を積み重ね，④家族介護者と患者が自ら協業作業を拡大していくというプロセスを提案した．

作業療法士は，家族介護者と対象者の協業に働きかけ，家族同士の生活行為の整理や作業の実践を試みていることがわかった．本研究で得られた知見は，訪問作業療法の家族援助支援の指針となると考えられる．しかしながら，訪問作業療法の介入で導入された協業作業の実践が，家族にどのような影響を与えたかを知る必要がある．そして，訪問作業療法の家族援助技術モデルが，臨床現場で家族介護者と対象者の実践が介護負担や介護肯定感にどのような影響を与えているかを知ることは今後の課題である．

発表論文：

・Minami S, Kobayashi R, Kyougoku M, Matuda I (2013) Occupational Experiences of and Psychological Adjustment by Family Members of Cancer Patients. Hong Kong Journal of Occupational Therapy 23: 32-38 http://dx.doi.org/10.1016/j.hkjot.2013.06.002

・Minami S, Kobayashi R：An Occupational Performance Patterns of Family Members of Terminal Cancer Patients: Typology of family palliative caregivers and occupation performance patterns（投稿中）

・南征吾，小林隆司：訪問作業療法における家族援助技術－生活行為の拡大を促す作業療法－．日本作業療法研究学会雑誌．（掲載許諾）

［第20条様式：Ａ４判］

審査結果の要旨

2015年2月12日（木）の最終試験に引き続いて，審査委員会を開催し論文を審査した．

審査対象となる論文
　訪問作業療法における家族介護者の理解と援助技術に関する研究

論文の概要
　地域包括ケアシステムの在宅医療体系の充実により，患者の人生の最期を自宅で看取る家族介護者が増大すると考えていた．本論の目的は，在宅療養を支援する家族介護者の作業経験と作業適応を知り，作業療法の家族介護者に対する家族支援の実体構造を明らかにすることであった．
　第1章では，緩和在宅療養を受けているがん患者の家族介護者の作業経験と作業適応についての研究であった．本章の目的は，家族介護者の作業適応に寄与する作業の影響を明らかにするために，患者が没後1年以上を経過した家族介護者を対象者に質的研究を採用し実施することであった．
　第2章では，終末期がん患者家族の作業類型化と作業遂行パターンについての研究であった．本章の目的は，第1章のデータをもとに事例-カテゴリ・マトリックスの手法を用いて，各事例のカテゴリの内容とパターンを分析し，それを基に事例を作業遂行パターンと作業類型に分類することであった．
　第3章では，熟練訪問作業療法における家族援助技術の明確化し，生活行為の拡大を促す作業療法についての研究であった．本章の目的は，訪問作業療法士の家族介護者に対する援助技術のプロセスについて質的研究を用いて分析することであった．
　総合考察では，第1から3章までをまとめて，家族介護者を理解するための視点と家族介護者と患者との協業作業の援助プロセスを提案していた．前者においては，家族介護の負担感や介護力を正当に見積もる能力が最も訪問作業療法士に求められる視点であった．後者においては，①家族介護者と患者の関心を抱いている協業作業を整理し，②家族同士が乗り越えられそうな挑戦課題を提供し，③家族介護者と患者が成功体験を積み重ね，④家族介護者と患者が自ら協業作業を拡大していくというプロセスを提案していた．
　本論の限界と課題では，作業療法士は，家族介護者と対象者の協業に働きかけ，家族同士の生活行為の整理や作業の実践を試みていることがわかった．本研究で得られた知見は，訪問作業療法の家族援助支援の指針となると考えていた．しながら，訪問作業療法の介入で導入された協業作業の実践が，家族にどのような影響を与えたかを知る必要があるとした．そして，訪問作業療法の家族援助技術モデルが，臨床現場で家族介護者と対象者の実践が介護負担や介護肯定感にどのような影響を与えているかを知ることは今後の課題であることを指摘していた．

審査結果
　以下の観点から、全員一致で、博士論文に相応すると判断した。

１．保健科学の学術的発展に寄与すると思われる．
２．倫理上の配慮がなされている．
３．基礎となる論文が査読つきの英文雑誌に掲載された．
４．論文にオリジナリティーが認められる．
５．研究目的が明確であり，先行研究が十分検討されている．
６．方法が追試可能である．
７．結果が明確に示されている．
８．信憑性のある研究方法を用いている．
９．結果の解釈が真摯におこなわれている．
１０．文献が十分かつ適切に引用されて議論が展開されている．